様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００５８８

研究課題名（和文）「系列別語彙」の拡充とそれを使用した琉球語の歴史言語学的考察

研究課題名（英文）Development of "Keiretsubetu-goi" and diachronic analysis of the Ryukyuan languages

研究代表者
松森　晶子（MATSUMORI, Akiko）

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：２０２３９１３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：琉球語の歴史言語学的考察に役立つアクセントの型別の語彙集（系列別語彙）の充実と確立を目指し、沖縄本島中部の明瞭な3型アクセント体系を持っている金武町の方言を調査し、アクセント型別の語彙リストを作成した。途中コロナ禍の影響を受け調査は中断したが、その期間には琉球諸地域の方言話者が編纂した語彙集を入手して調査対象の語彙を大幅に増加させた。最終年度にはその語彙集を使用して調査を再開し、2,300語の語彙のアクセント情報を入手した。それらは単独形とそれに3種類の助詞を付けた形式で保存され、音声データベース化された。沖縄、奄美地域を調査する調査者に広く使用してもらえるよう、これは近日中に公開予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「系列別語彙」とは、琉球祖語（沖縄や奄美諸島の言語の祖先）に存在していたとされる語彙のアクセント型別リストのことで、琉球諸島の歴史や系統関係を知るうえで重要な役割を担うものとされている。その系列別語彙の確立を目指し本研究では、明瞭なアクセント型の対立を保っている沖縄本島中部の金武町の方言を詳細に調査し、約2,300語の語彙のアクセント情報を収集し、それを電子的な形で保存し、データベース化した。このアクセント型別の語彙集が確立すれば、沖縄、奄美諸島の各地域で別々に調査をしていた方言研究者や各地の辞書編纂者に広く使用されることになり、それによって琉球語の歴史的考察が大きく進展することが期待できる。

研究成果の概要（英文）：In order to enrich and establish the list of accent-based vocabulary for Ryukyuan to be used in the future historical studies of the Ryukyuan languages, field research was conducted on the dialect of Kin located in the center of Mainland Okinawa Island, the system of which clearly retains the three accent patterns of proto-Ryukyuan. The same type of fieldwork was originally planned for Miyako island, but was not possible because of the influence of COVID 19. However, we could increase the number of words for the fieldwork by looking up the word lists made by the local people of the areas around Kin during the period of COVID. As a result of the fieldworks, accent information for about 2,300 words, attached with three types of particles, were collected in Kin, stored digitally, and made into a form of sound database. The database will be open to public in near future, to be used for fieldworkers of the languages of Okinawa and Amami regions.

研究分野：言語学

キーワード：琉球語　歴史言語学　アクセント　沖縄本島　系列別語彙　音声データベース

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

琉球祖語の韻律体系は、その名詞に 3 種類、動詞・形容詞に 2 種類の韻律型の区別があったと想定されており、それらの型の区別は一般に「系列」と呼ばれている。（これに対して、本土諸方言における同様な型の区別は「類別」と呼ばれている。）従来の琉球語の記述研究では、それぞれの研究者が別個に調査を行って各方言の語彙やそのアクセント情報を収集していたため、集められた語彙の種類がまちまちで、歴史的考察を目指した方言間の比較研究が困難な状態だった。

そこで提案されていたのが、「系列別語彙」を使用して調査を組織的に行うことである。「系列別語彙」とは、琉球祖語の体系に推定される 3 種類の韻律型のそれぞれに所属する語彙についての仮説のことだが、その「系列別語彙」を使用して調査を行うことは、各地で収集される語彙の種類を揃え、それによる比較歴史言語学的考察を行いやすくするという利点がある。しかし本研究開始当時までに提案されていた系列別語彙の語彙数はせいぜい 250 語ほどに限られており、その総数を大幅に増加させることが、琉球語の通時的研究にとっての喫緊の課題であった。

２．研究の目的

そこで本研究では、

①琉球祖語の韻律体系に存在していたことが想定される 3 種類の韻律型を現代に継承している琉球の方言に焦点を当てて、その体系の語彙をそのアクセント型とともに大量に収集し、系列別語彙の候補語の総数を拡大すること、

②それを用いてこれまで申請者が調査を行ってきた北琉球（奄美・沖縄地域）の歴史言語学的な考察を行うこと、

という 2 つの目的を掲げて調査と分析を開始した。

３．研究の方法

まず、アクセント型別の語彙のリストがこれまでにすでに提示されている北琉球の諸方言（首里、那覇、今帰仁村、伊江島など）の辞書類を参照しながら、調査語彙の候補語リストを作成した。さらに、主として沖縄本島中部の諸方言（金武町、石川市など）の方言の話し手が編纂した語彙集から拾い上げた語彙を、その候補語リストに順次付け加えていき、調査語彙の総数を拡充した。次に、金武方言の伝統的方言の話し手に依頼し、そのリストの語彙を単独形、および 3 種類の助詞を付加した形で発音してもらうことにより、リストにあるそれぞれの語が金武方言の 3 種類の韻律型のうちのどの型で出現するかをチェックした。それらはデジタル録音の形式で保存された。その保存された音声データから、各語についての情報を切り取り編集し、音声データベースを作成した。

４．研究成果

まず研究目的の①については、最終的に金武方言において約 2,300 語の語彙の音形とアクセント型のデータが収集され、それを音声データベースの形に整えることができた。その音声データベースは現時点でほぼ完成しており、あと 700 語ほどの追加語彙の編集を終えるのみになっている。それは、近日中に公開予定である。

次に②の目的については、本科研で収集したデータを使用して、次のような琉球語の共時的・通時的研究の成果を論文の形で生み出すことができた。

(1) 2019 年 2 月　A Prosodic Unit, Recursive Structure and Nature of Accent of Miyako Ryukyuan. *The Linguistic Review.* Vol. 29, No.1 (Special Issue: Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean): 51-83. De Gruyter Mouton

(2) 2019 年 4 月 「奄美大島南部･瀬戸内町における重音節発生の歴史的経緯 ―狭母音化との相対年代から考える―」『日本語の研究』 第 15 巻 1 号:1-17. 日本語学会

(3) 2021 年 3 月 「北琉球祖語の祖形再建のこころみ」『日本女子大学紀要 文学部』 第 70 号: 11-32.

(4) 2022 年 2 月「琉球祖語の韻律体系について」 窪薗晴夫･守本真帆 (編) 『プロソディー研究の新展開』 pp. 191-213. 東京:開拓社

(5) 2022 年 3 月「沖縄語首里方言における音節構造の変化と北琉球祖語の母音の音価推定」『日本女子大学紀要 文学部』 第 71号:45-68.

(6) 2023 年（刊行予定） Towards the Prosodic Reconstruction of Proto-Japanese-Ryukyuan.

Frellesvig, Bjarke, John Whitman and Satoshi Kinsui (eds.) . *Handbooks of Japanese Language and Linguistics: History.* Mouton de Gruyter

（1）の論文は、宮古諸島の韻律体系についての共時的な記述研究である。ここでは宮古諸島の多良間島と宮古島の上地・与那覇という集落のアクセント体系についての考察を行っているが、その考察のために文や複合語のデータを収集する調査表の作成段階で、本科研で作成した金武方言の語彙のリストを役立てた。

これに対して（2）の論文は、奄美大島南部とその離島の加計呂麻島の音節構造についての歴史的考察である。これら奄美大島南部の諸方言には、たとえば「首」を k ’u'p 、「兎」を ʔusa'k 、「袋」を ɸuk ’ɾu ,「油」を ʔapɾa (油)のように発音するなど、語末や語中に閉音節が頻出する。また「kutu:ba (言葉), waɾa:bï (子供)」のように語中の長音節も頻繁に観察される。本研究ではこれら重音節構造の発生の原因についての通時的考察を行い、これら重音節の生起は、この地域に過去に生じたアクセントの変化と切り離して説明することはできないことを論じた。この際、琉球祖語において各語がどの韻律型に所属していたかを推定する必要が生じたが、本科研で収集した金武方言の語彙のリストをその推定のために活用した。

（3）の論文は、北琉球諸語の複数の言語体系における同源語を比較しながら、その音対応をもとにした歴史言語学的考察を行ったものである。特に北琉球祖語から現代の北琉球の諸体系に至るまでの間に生じた「狭母音化」と「歯茎はじき音 ɾ の脱落」という２つの変化に焦点を当てながら、いくつかの語の祖形再建を行ったのだが、その際にも比較言語学的考察を目的として収集された本科研のデータを活用した。

また (4)の論文は、琉球祖語の韻律体系についての（現時点での）仮説を提示したものである。本稿では次のような韻律体系を、琉球祖語の体系として再建した。（なお、σという記号は音節を示す。また $\bar{\bar{\sigma}}$ に付された上線は高い音調の出現位置を示している。）

[琉球祖語の韻律体系の仮説]

	2 音節名詞 助詞付き言い切り形	3 音節名詞 単独言い切り形
A 系列（*LLH）	$*\sigma\sigma\bar{\bar{\sigma}}$	$*\sigma\sigma\bar{\bar{\sigma}}$
B 系列（*LHL）	$*\sigma\bar{\bar{\sigma}}\sigma$	$*\sigma\bar{\bar{\sigma}}\sigma$
C 系列（*HLL）	$*\bar{\bar{\sigma}}\sigma\sigma$	$*\bar{\bar{\sigma}}\sigma\sigma$

この体系を再建する根拠の一つとして、本科研で収集した金武方言のデータを使用した。さらに本論文中で、金武方言には次のような体系があることを報告したが、これはすべて、本科研によって収集されたデータに基づく。なお、nu は主格の助詞、kara は奪格の助詞である。

[沖縄本島の金武方言の 3 種類の型の区別]

[A系列]	[gama。（洞窟）	[gama nu。	[gama ka]ra。
	[kadʒi。（風）	[kadʒi nu。	[kadʒi ka]ra。
	[hagama。（羽釜）	[hagama] nu。	[hagama] kara。
	[kibuɕi。（煙）	[kibuɕi] nu。	[kibuɕi] kara。
[B系列]	[mi:]mi[:。（耳）	[mi:]mi: [nu。	[mi:]mi: [kara。
	[su:]ku[:。（アイゴの稚魚）	[su:]ku: [nu。	[su:]ku: [kara。
	[ʔudzu]ra[:。（鶉）	[ʔudzu]ra: [nu。	[ʔudzu]ra: [kara。
	[hasa]mi[:。（鋏）	[hasa]mi: [nu。	[hasa]mi: [kara。
[C系列]	ti:[da。（太陽）	ti:da [nu。	ti:da [kara。
	[na]:[bi。(鍋)	[na]:bi [nu。	[na]:bi [kara。
	gama[ku。（腰回り）	gamaku [nu。	gamaku [ka]ra。
	[ʔu]tu[ge。（下顎）	[ʔu] tuge [nu。	[ʔu] tuge [ka]ra。

（5）の論文は、過去に成された北琉球諸語･諸方言の辞書の記述や調査報告を活用しながら、内的再建と比較再建の方法を用いて、北琉球祖語に存在していた（と想定される）いくつかの語の祖形再建を試みたものである。特に首里方言に生じたと思われる音節構造の変化と、各種の音変化の相対年代を考察したが、その際に本研究で収集したデータを役立てた。

最後に（6）の論文は、日本語と琉球語の祖先（日琉祖語）の韻律体系再建に向けての記述研究の現状と、比較言語学的視点から調査を行う際のいくつかの重要な視点を提示したものである。この中に、本科研によって調査を行った金武方言をはじめとした北琉球の諸方言のアクセント研究の現状について、報告･解説した。　以上

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 松森晶子	４．巻 なし
２．論文標題 琉球祖語の韻律体系について	５．発行年 2022年
３．雑誌名 窪薗晴夫・守本真帆　（編）『プロソディー研究の新展開』東京：開拓社	６．最初と最後の頁 191-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松森晶子	４．巻 第71号
２．論文標題 沖縄語首里方言における音節構造の変化と北琉球祖語の母音の音価推定	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本女子大学紀要 文学部	６．最初と最後の頁 45-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松森晶子	４．巻 第70号
２．論文標題 北琉球祖語の祖形再建のこころみ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『日本女子大学紀要 文学部』	６．最初と最後の頁 11－32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松森晶子	４．巻 第15巻1号
２．論文標題 奄美大島南部・瀬戸内町における重音節発生の歴史的経緯―狭母音化との相対年代から考える―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本語の研究	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Akiko Matsumori	４．巻 Vol. 29, No.1
２．論文標題 A Prosodic Unit, Recursive Structure and Nature of Accent of Miyako Ryukyuan	５．発行年 2019年
３．雑誌名 The Linguistic Review	６．最初と最後の頁 51-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 松森晶子
２．発表標題 汎宮古文法（韻律部門）の青写真を描く―宮古諸島のプロソディーの 多様性解明にむけて―多様性解明にむけて―」　国立国語研究所第５回プロトジャポニック研究会　（オンライン）
３．学会等名 国立国語研究所第５回プロトジャポニック研究会　（オンライン）
４．発表年 2023年

１．発表者名 松森晶子
２．発表標題 日琉祖語の韻律体系再建に向けて―今後の課題―
３．学会等名 日本言語学会 第164回大会ワークショップ「日琉祖語の再建に向けての新たな展望：琉球諸語の視点から」（オンライン）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 松森晶子
２．発表標題 宮古諸島における「韻律領域の拡張」と多良間島のプロソディー
３．学会等名 国立国語研究所 共同研究プロジェクト　「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」2022年度第１回合同研究会（オンライン）
４．発表年 2022年

１．発表者名 松森晶子
２．発表標題 沖縄語首里方言の音節構造の変化と祖語の母音の音価推定
３．学会等名 国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」2021年度前期発表会第6回　（オンライン）
４．発表年 2021年

１．発表者名 松森晶子
２．発表標題 沖縄本島北部の三型アクセント体系の諸相―通時的視点から―
３．学会等名 国立国語研究所共同研究プロジェクト　「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」共同研究会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関